

平成23年度課題評価結果対応方針

農林水産部水産局・(水産総合研究センター)

1 総括に対する対応方針

区分	研究課題名	主な指摘事項等	対応方針
中間評価	ゴマサバの生食用冷凍加工技術の開発	<ul style="list-style-type: none"> ・現場のニーズをとらえた、漁業・加工経営や地域経済に直結する課題であり、スピード感を持って強力に継続する必要がある。 	<p>研究終了予定の平成25年度までに確実に研究成果を上げ、現場への技術普及が図られるよう、研究項目「生食用ゴマサバ製造の実用化技術開発」の開始を1年早め、研究業務に研究室全体で対応し、予算配分率を増加させ、重点的に研究を進めていきます。</p>

事後評価	<p>秋季三番瀬におけるノリ生育不良と漁場環境の関係 説明</p>	<p>・年末のノリ生育不良の原因が高水温であることが明らかになり、他の湾内漁場への応用も可能な成果を得たことで、少なくとも計画どおりの成果が得られたと考えられる。海洋環境まではコントロールできないので、今後はこの成果を生かすために赤潮で行われているような予報や一時的避難の方法などの研究を引き続き行うことが望まれる。</p>	<p>本研究で得られた知見を活用し、毎年度の海況に応じたノリ生育に適した場所での効率的な養殖が展開できるよう、平成23年度から新規課題「三番瀬ノリ養殖漁場における好適漁場の推定のための漁場環境変動パターンの類型化」に着手しています。この研究では、効果的な海況モニタリング手法の開発と短期の環境変動予測技術の開発に取り組み、平成25年度までに環境変動予測に基づく好適な漁場の推定を行い、環境変動に合わせた最適な漁場利用方法の提示を目指します。</p>
------	--	--	--

2 課題評価結果対応方針

(1) 中間評価

<課題評価結果対応票>

研究課題名	ゴマサバの生食用冷凍加工技術の開発	
研究期間	平成 22～25 年度	
評価項目	指摘事項	対応方針
2. 研究計画 の妥当性及び達成 の可能性 ① 計画内容 の妥当性及び達成 の可能性	① 実用化のために、定置網とサバたもすくい網漁業を対象とし、漁業種類別に魚体の取り扱い方法を調査するなど、県の水産業に直結した、適切な研究計画である。(なお 消費の裾野を広げるために、できれば解凍方法の簡単なマニュアルもあるとよい)。	① 解凍方法によって品質が大きく影響を受けるので、消費拡大を図る観点から、消費形態に応じた簡易な解凍マニュアルの作成にも取り組みます。
	② 漁業現場や流通・加工形態を反映した研究計画になっており、適切である。ただ、現場にとっては一刻も早い実用化が求められると考えられるので、研究資源等の問題もあるかとは思いますが、前倒しで計画を早められないか。	② 本研究課題の研究項目の一つ「生食用ゴマサバ製造の実用化技術開発」については平成 24 年度から着手する計画でしたが、すでに業界から開発要望と協力の申し入れがあり、他の研究項目との資源配分の調整を図り、平成 23 年度に開始しました。

	<p>③ 品質評価については、K 値等による鮮度・性状の評価だけでなく、官能試験や市場性、嗜好性などの評価も重要である。</p>	<p>③ 研究の実施計画に盛り込むこととします。品質評価は可能な限り漁業者、加工業者と共に行い商品性（市場性・嗜好性）を確認していきます。</p>
<p>②研究資源の妥当性</p>	<p>④ 研究計画は効率的に計画されているものの、研究費も補助者を含む人員数も少なく、当該センターの負担が大きい。</p>	<p>④ 研究計画は、人員・予算を考慮し担当研究室が実施可能と判断した上で立案しています。今後も主担当者に対して過剰業務とならないように補助者をはじめ研究室全体で業務に対応して いきます。また研究費については平成 2 4 年度から、本研究への配分率を増やしていきます。</p>
<p>4. その他</p>	<p>⑤ 技術が普及すると当然他の地域でも取り組みが始まり、競合によって価格低下が引き起こされる可能性があるため、特許取得やブランド化等の知財戦略が必要である。</p>	<p>⑤ 現段階では特許出願の計画はありませんが、独自技術が開発されれば出願を検討していきます。製品については地域ブランドの育成に活用できるよう地元市等と連携を図っていきます。</p>

<p>総合評価</p>	<p>⑥ 現場のニーズをとらえた漁業・加工経営や地域経済に直結する課題であり、スピード感を持って強力に継続する必要がある。</p>	<p>⑥ 研究終了予定の平成25年度までに確実に研究成果を上げ、現場への技術普及が図られるよう、研究項目「生食用ゴマサバ製造の実用化技術開発」の開始を1年早め、研究業務に研究室全体で対応し、予算配分率を増加させ、重点的に研究を進めていきます。</p>
-------------	---	---

(2) 事後評価

< 課題評価結果対応票 >

研究課題名	秋季三番瀬におけるノリ生育不良と漁場環境の関係解明	
研究期間	平成 20～22 年度	
評価項目	指摘事項	対応方針
4. その他	① 沿岸の海洋研究として、学術的に高く評価できるものであり、専門誌への公表を薦めたい。	① 本研究の後継課題である「三番瀬ノリ養殖漁場における好適漁場の推定のための漁場環境変動パターンの類型化」(平成 23～25 年度実施) から得た知見を合わせた上で、学術誌への投稿を検討していきます。

	<p>② 今後、沖合域の黒潮流路変化や栄養塩等との相関を明らかにすることにより、さらに確実性の高いノリ作柄予測技術を確立できる可能性が高く、研究の継続が望ましい。</p>	<p>② 今後の展開として、平成23年度から新規研究課題「三番瀬ノリ養殖漁場における好適漁場の推定のための漁場環境変動パターンの類型化」に取り組んでいます。このなかで、東京湾奥部への黒潮系暖水の侵入についても漁場外の水温情報による把握を行い、25年度までに作柄に影響する環境変動の短期予測手法の確立を目指します。</p>
--	---	--

<p>総合評価</p>	<p>③ 年末のノリの生育不良の原因が高水温であることが明らかになり、他の湾内漁場への応用も可能な成果を得たことで、少なくとも計画どおりの成果が得られたと考えられる。海洋環境まではコントロールできないので、今後はこの成果を生かすために赤潮で行われているような予報や一時的避難の方法などの研究を引き続き行うことが望まれる。</p>	<p>③ 本研究で得られた知見を活用し、毎年度の海況に応じたノリ生育に適した場所での効率的な養殖が展開できるよう、平成23年度から新規課題「三番瀬ノリ養殖漁場における好適漁場の推定のための漁場環境変動パターンの類型化」に着手しています。この研究では、効果的な海況モニタリング手法の開発と短期の環境変動予測技術の開発に取り組み、平成25年度までに環境変動予測に基づく好適な漁場の推定を行い、環境変動に合わせた最適な漁場利用方法の提示を目指します。</p>
-------------	--	--